

塚本さんの思い出

大 脇 直 明*

塚本さんがあのように突然他界されるとは思ってもいなかったことで、水路部長を退職された後も比較的交流が深かったわれわれすらそう感ずるのだから、その他の方面で塚本さんを知る方々はさぞ驚かれたことであろう。若いころ肺結核にかかられたそうだが、水路部長就任までは極めて元気な方であった。しかしその前後から気管支拡張、眼底出血、十二指腸潰瘍のために2回も入院され、その後は健康に大変気を使っておられた。何分にも水路部長という職は雑事が多くて担当の激職であるからかなり疲労も激しく、特に御長男を喪われてから漸く憔悴の気味が見受けられた。水路部に出勤されたとき階段を一步づつ休みながら昇られることもしばしばであった。退官後も月一回の会合を楽しみにして顔を出されていたが、外見と反対に、ディスカッションは張りのある大きなで元気よく長時間なされたものである。しかし気温が急変すると体の調子が悪いといって欠席されたし、夜間に及ぶ時は明るいうちに中座されるのが常であった。10月は風邪気味で欠席され、11月の会合にも風邪がよくなるから欠席すると自ら電話をかけてこられたのが、私にとって最後の会話となってしまった。前述のように絶えず健康に注意されており、晩年は少しの風邪でも大事をとって寝ておられたので、大変申しわけない次第であるが、さ程重態とは思っていなかったのである。それが最悪の帰結を見たのであるから、誠に痛恨にたえない。亡くなられたときの御話によると、肺活量が常人の1/3~1/4であったという。したがって晩年は精神力で生きておられたとって過言でなからう。

塚本さんはまことに水路部に一生を捧げられた方であった。退官後ですら何か気がつくとき私達に電話をかけてきて水路業務の現在や将来について経験に基づく有益な助言や意見を述べられることがしばしばであった。

改めていうまでもなく氏は水路部で種々の業績を残された。航海天文学・暦計算の分野では戦前戦中の悪条件にかかわらず当時水路部員であった鈴木敬信氏とともに日本の天体暦である天体位置表を *ad hoc* に計算し刊行された。また世界にさきがけて航空天測表を作られたし、航海用諸暦の改良や新形式の暦——たとえば高度方位暦——の開発をされた。また航法においては夾角天測法、軌跡航法などを創案し、さらに水平線俯角や異常大気差に独創的な研究をされた。航法の基礎論について統一的立場から透徹した見解を有しておられたのである。

現在は天文航法それ自身が古典となりつつあるが、この分野に関する日本のすぐれた成果として歴史的価値をもつものと信ずる。

測地学では天文経緯度観測法について各種の改良や創案をされた。それとともに星食測地法の実用化に東京天文台や国土地理院と協同して貢献されたし、後に衛星測地法の開発にも力をつくされた。また水路部にとって忘れられない功績は電子計算機の導入で、今日行なわれている暦計算をふくむ種々の計算やデータプロセシングの基礎は氏によって確立されたのである。

氏について特筆すべきことは水路部における活動が単に天文学と測地学にとどまらなかったことである。水路測量学はいうまでもないが、海洋学、海図作成、さらに印刷に至るまであらゆる面で卓越した見解を有し、水路部長として当然の職責以上に研究してこれを指導し、改善に意を用いられた。このことは編暦課長時代にあってすらなされたもので、部内で特別な存在であった。水路業務における功績で氏は4回も大臣表彰を受けていられた。

氏は水路学の本質を把握し(塚本さんは常に哲学という言葉を用いられた)。すべてをある共通な基礎原理に基いて実践されたのであった。上述のごとき広い視野と活動分野はこの必然的所産である。そして卓抜な識見と鋭い判断力、批判力を持ち、独創性に富んでおられたことが塚本さんの大きな特徴として挙げることができる。まことに塚本さんは偉大な *hydrographer* の典型といふべき稀有の存在であったと思う。われわれはよく塚本さんを *hydrographic philosopher* (*philosophic hydrographer* でなく) と呼んだものである。塚本さんは合理主義者で、論理性を最も重んじた。したがって筋の通らない議論はもちろん、通俗的な妥協は最も嫌われたものである。ある意味で *rigorist* でありまた理想家でもあった。しかし現実をよく認識し、物事の本質に立脚した正論を吐かれたものである。その意見は時として人の意表をつき、言行ともに時流におもねらずあるいは奇狂とも、ときには現状の逆行ともとれるものがあったが、一面時代の真の動きを容するにも敏であった。しかしこのような識見と独創的思考が部内の一般に必ずしも受け入れられたとは限らない。氏の真価を理解する人間が多くなかったのも事実である。全体が氏の理想通りにはなかなか動けなかったことにかかなり焦燥されていたようである。ある意味で塚本さんは孤独な人であった。

かくして一部の人には塚本さんが頑固、冷厳、苛借な

* 海上保安庁水路部

き叱正と測り知れぬ思考をする瘠身蒼面、眼のみ鋭く唇の引き締った恐怖の人と映っていたようである。これが皮相的見解であることはいうまでもない。心の暖かい後進のことをよく心配する人もあった。いわゆる僕という点で厳しい面があったが、明治人の親心とでもいうべきものであろう。塚本さんの逸話は、いずれも単なる固物でなく、人間味のにじみでたものが数多い。ある時側近が構内で塚本部長をさがしていたら、一室で若い連中と談笑するのが聞えた。盗み聞きすると彼等が喜びそうな話をしながら天文観測について教えておられたという。この測近も恐怖の部長と思っていた一人だから、この人にしてこの反面ありとはと驚嘆したそうである。また編暦課長時代ある男を自分の課に配置換えしようとしたとき、その人が悪行を恣まましていたので課員全体が猛反対した所、塚本さんは使いようでは将来見所があるという断乎自分の課に引きとった。結果は塚本さんのいう通り、彼は今では編暦課の重要人物の一人になっている。しかし世俗的名利を追わず、世渡りはむしろ下手であった。ユーモラスで滑稽味さえあり、飄々として枯仙哲の趣があった。

塚本さんは若いころの哲学の勉強、特にカント哲学の影響を多分にうけてあられたと思われる（御自身もときにそうもらしておられた）またキリスト教の影響もあった。常々自然科学の真理における蓋然性と神における絶対の真理とについて口にしておられた。

塚本さんは議論が好きであった。部長室にあると自動車の中とを問わず、天文学や測地学はもちろん、水路部運営問題、さらに社会・政治問題まで持ち出して議論を

しかけてこられた。これらの議論は今も懐しく、失礼ないい方かも知れないが、よい論争相手を失ったという感を深くする。塚本さんは折にふれて部下の教育法について述べられたが、ゆさぶり法とでも名付けるものが非常に効果があるというて笑っておられた。つまりソクラテスのダイアローグに類似するやり方である。実際これで困らされた人がずい分いると思う。

塚本さんは前に述べたように一部では敬遠されたが、かえって若い人達に敬愛されておられた。天文専攻者として当然である以上に観測やフィールドワークが好きで、部長になられる前は若い人達と一しょによく伊豆白浜の水路観測所や青ヶ島などに行かれたものである。仕事では厳しいが一度くつろげば彼等のよい話相手になって打ち解け、親爺とってしたわれていた。身辺を飾らず、野外ではよごれた作業服に手ぬぐいでほほかぶりをした村夫子然とした風であった。いたずら好きで、しかもいかもの食いの大将でもあった。面白い逸話が少からず残されているが省略する。

塚本さんは音楽を大変好まれた。フルートは素人ばなれがしたものだそうである（不幸にして一度も拝聴する機会がなかった）。退職記念にステレオを贈呈することになったら実に慎重に吟味されたのも思い出の一つである。また園芸も趣味としておられた。昔世田谷の家に引越されたとき、荷物トラック一杯にピアノとサポテンだけだったというておられた。塚本さんから昨年冬、エイザンゴケというコケを頂いた。何でも大変珍貴な種類なのだそうである。園芸にあまり趣味のない私だが、これだけは大切に育てていくつもりである。

雑 報

長周期変光量の極大の変動 長周期変光量の極大は毎回厳密には同じように再現しない。実際は極大等級と二つの極大間の時間は、時によって変動があり、これらは今までは一般に無法則であると考えられてきた。オハイオ州立大学のハリントン (Patrick Harrington) はこれらの値に何か統計的の傾向があるかどうかを研究した。(A. J. 70, 569, 1965)

彼はキャンベルが 1995 年に AAVSO のアマチュアの観測を整理集成した“長周期変光星の研究”の中から材料をとった。この書物には 390 個の星がふくまれているが、その中のよい観測が長期間に連続している 165 個をえらんだ。これらの大多数はソ連の変光星表ではミラ型で、少数はミラ型と半周期星の中間の SRa で、1 個だけ SRd の Z Aur をふくんでいる。

これらの量の隣合う二つの極大の高さの差 Δm と、

二つの極大間隔の差 Δt とをすべての星について調査する。そして平均値からの残差を (Δm についての残差 ΔX と Δt の残差 ΔY) 求め、 ΔX と ΔY との相関をしらべると、この相関は、大多数の星について同じ傾向である。次表は相関係数 r とその信頼度を示したものである。

Level of significance	Correlation between X_i and Y_i	
	positive r	negative r
$\geq 95\%$	67 星	1 星
$\geq 99.5\%$	33	0
$\geq 99.95\%$	18	0

r が正というのが大多数で、これは二つの極大間の時間間隔が平均よりも大きくなると、後の極大光度が暗くなり、逆の場合は逆になることを意味する。また r が負